無料

すくらむ

かわさきの男女共同参画情報誌

vol.
81
2025.6

次世代へ向けて ～川崎で生きる女性の声～

https://www.scrum21.or.jp/

特 集
Special Contents

次世代へ向けて～川崎で生きる女性の声～

すくらむ21では、2022年度より「かわさきで生きる女性の声の聞き書き調査」を実施しています。これまでの特集（vol.75、78）に続き、今回は「次世代へ向けて」をテーマに、セクシャルマイノリティー当事者として居場所づくりの活動をしている岡野さん、女性の割合が少ない理工系分野で活躍する平野さん、女性の視点からの防災活動を手がける上園さんの3名にトークサロンとして新たにお話を伺いました。その一部を皆様にお届けします。

インタビュー
＃1

yellow Rocket合同会社
CEO（代表社員）
おかの
岡野 めぐみ さん

ご自身の活動紹介をお願いします。

すくらむ21で、10代から25歳までのセクシャルマイノリティーや、そうかもしれない人に向けた「マーブルリバー」という居場所づくりをしています。他には、性教育や性暴力の抑止に向けた活動、性に関するカルチャーの探究から、フェミニズムなどの学問的なものまで、性について幅広く学び、活動しています。大学時代は、後述のとおり、サークル活動として動いていましたが、2021年からは「イエローロケット」という会社をつくり、講演依頼などを受託しています。

社名は、色にも性別や人種などのイメージが付いていることを受けて、比較的ジェンダーニュートラルとされる「イエロー」と、あとビートルズの「イエローサブマリン」の陽気な感じが好きで、自分の望む未来に向けて飛んでいけるよう「ロケット」にしました。

子どもの頃の話をうかがえますか。

私は1996年生まれで、今27歳です。[*1] 母方の実家の群馬県高崎市で生まれ、相模原市で育って登戸に近いカリタス女子中学高等学校に通い、20歳で結婚して登戸に引っ越してきました。花柄ピンクみたいな服も着たいときには着て、ただやっぱりジーパンにシャツがラクだと感じる子どもでした。一匹狼的なポジションが多くて、それでもみんなとは無難に仲良くする感じでした。

カリタスに入ったきっかけは何ですか。

幼馴染の子たちがすごくヤンキーだったので、地元の中学に行ったらヤンキーになると思い、中学受験ブームも相まって、校舎がきれいなカリタスを選んだ感じです。成績が悪くて誰も受かると思っておらず、カリタスでも全然、勉強しなかった。1年生から演劇部に入り、あとはずっと遊んでました。“お嬢さま学校”のカリタスでは、周囲の生徒や先生、保護者の方にひどい不良少女だと思われていました。性行為の初体験が中1で、高校生になると女性とも付き合うこともありました。最初は自分がバイセクシュアルだと思っていたんですが、マイリー・サイラスというアメリカの歌手が「パンセクシュアル」（あらゆる性別の人を恋愛対象とすること）と言っていて、「私もこれだ」と思い、高校生から大学生にかけて性のあり方を表す言葉を獲得していきました。

大学進学は、どう選択したのですか。

母が美容師、父親が調理師の専門学校出身で、大学ぐらいは出てほしいということで中3からAO入試の対策塾に通いました。「自分は人生において何を成し遂げたいのか」から始めて、そのためにはこれを勉強して、そのためにはこの大学のこの学部に入ってと逆算して準備して、中央大学法学部政治学科に受かったんです。中3で決めた「人生かけて、したいこと」が、「困ってる人の役に立ちたい」

*1 2024年8月取材当時

でした。社会的に困っている人を助けるなら弁護士か政治家か、法律や政治を使って助けられたらすてきだなと思って今に至ります。

困ってる人を助けたいと思ったきっかけは。

小学生の頃から、困っている人がいたら絶対、味方になっていたんです。私はキリスト教徒ではないですが、カリタスの「奉仕の心」という教育の中で不良少女が“矯正”されて、人のために役立つことが生きるよろこびだというスタンスにリセットされたんですね。

私には「男性」「女性」という言葉が遠く感じるので、「男」と「女の子」と呼ぶんですけれど、男とは結婚できて生活面などの保障もあるのに、私の大好きな女の子たちとは法的な保障が一切なかった。当時疑問を抱いた私のように日々困っている人たちの、現行法の範囲内で一番の味方になれる弁護士になりたいと思ったんです。しかし、塾の先生に、高校生にしては悲観的なので、入試では「同性婚を制定します」「そのために政治家になります」と書いたほうがいいと言われ、結果的には政治学科に入りました。

どんな学生生活でしたか。

高校生の時からフランスの法制度や PACS（性別に関係なく二人が持続的共同生活を営むための連帯市民協約）について勉強し、大学ではクィア理論などをばりばり研究できると思ったんですが、ジェンダー政治論のゼミに入って同性婚に関する文章を書いたら、それまでジェンダーを勉強してない子に「え？バイセクシュアル？大丈夫なの？」って言われた。中高生の時は私が性別の枠にとらわれない子だと周りがみんなわかっていて、「何が問題なの？」と平然としていたのに、大学ではそんな窮屈なやり取りを毎週やるわけですよ。ゼミを休んで先生に泣きながら相談して、後期はゼミが怖くて全然行けませんでした。

この反動で研究を諦め、2年生の時は近くの川でザリガニを釣るゼミに入り、法律を勉強する研究室にも所属していたので 3 年生では法律系のゼミに入りました。4 年生の時は、お声がけいただき、ジェンダー論を教えていた廣岡守穂先生のゼミに入り、ゼミで市民運動関連の本を出したんです。私の担当テーマはセクシュアルマイノリティーで、他大学の教授に寄稿してもらいに行きました。当時は LGBT という言葉がようやく広まったぐらいの時期で、原稿を頼んだ先生は「LGBT の市民運動をまとめて書きたい」と言ったんですが、私が「LGB と T の運動って全然違いますし、LGB の中でも違いますけど、どう書くんですか」と追及したら先生が原稿を書けなくなっちゃった。振り返れば、もっと優しく指摘すれば良かったと思いますが、対人コミュニケーションは未熟なままでしたね。そう先生を問い詰めることができる程度には、勉強したかなと思います。

大学でサークル活動もしていますね。

3 年生の秋頃に「中央大学 SEX を考える委員会」を作りました。相方とは「ちゃぶ台返し女子アクション」と組んだ学内イベントで出会いました。その時は性暴力抑止の話が多かったんですが、性の話にはセクシュアルマイノリティーや性教育の話などもあると思って、性を広く扱いたかった私たちが考えたのが「SEX」です。片仮名で「セックス」だと性行為だけをイメージしがちで、漢字で「性」だと真面目な印象を受ける。アルファベットしかないと思って名前をつけて、卒業するときに大学名を取って「みんなの SEX を考える委員会」になりました。サークル設立時に決めた「性のせいで苦しむ人をなくす」というフレーズを、今でも自分の心の中に持ちながら活動しています。

4 年生（2018 年）の秋の文化祭では、「AV の教科書化に物申す」という性教育イベントをしました。私たちの世代は公教育で性について全然習わず、セックスの見本が AV になってしまう。AV を模して性行為をすると性暴力の被害者が出る状況でした。第 1 部では AV の有名な男優さんや女優さん、性教育を手がける産婦人科医の先生に AV の内容やイメージを解説してもらい、「でも AV はフィクションだよ」と伝えました。第 2 部は性教育で、こうすれば相手の同意が取れて、妊娠や暴力、性感染症のリスクを抑えられると、人間関係の築き方も含めて参加者と共に学び、第 3 部は質疑応答でした。参加者は 1000 人、男優・女優目当ての若い男の子が集まり、目論見通りでした。

インタビュー
#2

株式会社ちとせ研究所

平野（ひらの） さやか さん

お生まれはどちらでしょう。

新潟県糸魚川市です。父の仕事の都合で 3、4 年に 1 度くらい転居しました。

どんなお子さんだったんですか。

母に聞くと、いろんなことに興味を持っていたようで、珍しい物があるとその瞬間に突っ走るような、迷子が絶えない子どもだったそうです。習い事も色々やらせてもらいました。バレエは今もたまにレッスンを受けにいきます。

『チャレンジ』という、毎月送られてくる学習教材のおまけに付いている科学キットが好きでした。たとえば雨を採って試薬の粉で着色して、酸性雨かどうかを見てみるとか。簡単な顕微鏡みたいなものも送られてきて、小さいんですけれど意外とちゃんとしていました。スライドガラスに切片を置いてカバーガラスを乗せて、髪の毛や紙、葉っぱなどを見ていました。

中学はどちらですか。

最初は仙台で、中学 2 年の夏に東京の調布市に転居しました。公立中学に入ったんですが雰囲気が全然違い、受験準備で塾に通う人もいて、学校に慣れるのに必死でした。

将来の夢みたいなことは考えていたんですか。

私は中学校ぐらいから白衣を着る仕事に憧れていたんです。薬剤師とか研究者とか、薬に関わる人はかっこいいなって漠然と思っていました。白衣の仕事といえば医者もそうですが、体を治すのは薬なんじゃないかなと。それで、大学に薬学部がある付属高校に入りました。

理数系は比較的得意だったけれど物理は苦手で、いつも赤点のボーダーラインでした。高校 1 年は普通科で、2 年生から理系特進クラスに入りました。薬学部を受験するための偏差値基準はクリアしていたのですが、学部の人気が高くて上位選抜からもれてしまった末に、学部を選定しなおし、薬物に関わる勉強ができる理工学部の応用化学科に入ることにしました。男女比でみると応用化学科は女性が 25%で、理系にしては多いかもしれません。理工学部全体としては、女性比率は約 10%でした。

大学での研究内容を説明していただけますか。

がん治療のため、ピンポイントでがんの周辺の細胞に薬を運ぶ入れ物を「キャリア」と言うんですが、ナノメートルサイズ（10 のマイナス 9 乗メートル）の入れ物を化学合成で作るんです。薬と組み合わせて細胞に与え、細胞がどう元気になるかを研究しました。薬を入れたキャリアに蛍光色素を付けて、培養した細胞と一緒に振り混ぜて、キャリアが細胞の外にくっついて光っているのか、中に入っているのかを見るんです。

私のいた研究室は他大学と学生を交換していて、私は大学の隣にある東京医科歯科大学の生体材料工学研究所に大学 4 年生から行かせてもらい、大学院もそこに進みました。ところが修士課程を卒業する 3 月に、東日本大震災が起きたんです。一緒に研究していた大学の先生がその 1 年前に東北大学に移っていて、その先生と連名で論文を出す予定だったので、震災が落ち着いて 2 年くらいたってから論文を発表しました。

修士の研究室の女性の割合は、どのくらいでしたか。

研究室には全部で 20 人か 30 人ぐらいいて、5 割は女性でした。私のように違う大学出身の人や、医療関係者や企業から来ていた人もいたと思います。すごいなって感嘆する方ばかりだったですね。私は理系職に進みたいとは思っていたけれど、自分に合うのかは別で、研究という仕

事をやってみないと分からないというのはありました。私はいろんな研究をさせてもらい、熱中して朝 10 時から夜 11 時ぐらいまで研究室にいました。

やっぱり研究や物作りに関わる仕事をしたいと思い、メーカーや薬の臨床試験関連の会社などで就職活動をしたんですが、リーマンショックの後であまりうまくいきませんでした。その後、縁あってメーカーなどの研究開発部門に研究者を派遣する会社に就職しました。派遣先の会社の近くに住んで、毎日、他の会社の研究プロジェクトの一員として通うんです。

どのくらいの期間、派遣されるんですか。

会社によりますが、1 カ所だいたい 2 年とか 3 年です。営業さんが私を売り込んで、次の会社との面談も自動的に入るので、業務期間が終わるとすぐ次の会社に移るんです。最初の派遣先は小田原にあるフィルム関係を取り扱う化学メーカーで、製品を細かく評価する分析部門に派遣されました。次に派遣された会社は武蔵小杉にある産業用ディスプレイの会社でした。パソコンやテレビに使われるディスプレイは、ガラスとガラスの間の狭い空間に液体が敷き詰められていて、裏にある電極に電気を流して液体の中の分子の向きを変えることで色が変化するんです。そのディスプレイ映像を駆動するための液晶剤を開発していました。

3 カ所目の配属先は電力会社では、藻類の研究に出会いました。ここでようやく、藻が出てきたんです。もう少し薬学や生物に関わる仕事がしたいと伝えていたのですが、その結果初めて藻類と出会うことになり、電力会社に派遣されました。

▲ 藻類造形物の仕上がりを協力会社様と協議中

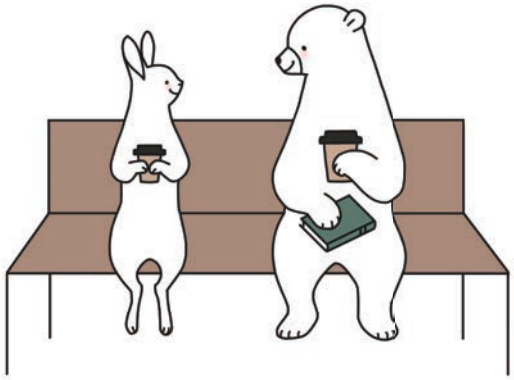
電力会社で、なぜ藻なんでしょう。

その会社では、電力以外にも様々な資源で社会貢献をすることを目指していて、その中に藻類を使った研究がありました。川崎の尻手に研究所があって、仕事は藻類の培養に関する基礎的な研究でした。丸の内のような都市中心部のビル群の中庭や屋上で、藻類の働きで空間中の CO2 ガスを吸収させたい、そのための技術を研究してほしいということでした。

やってみて面白かったですか。

この時は、派遣ではなく会社が受けた個人の業務委託契約でした。大量の水を使わなきゃいけないので、体力的に大変な面もありました。都市空間を想定して屋外の日の当たる所で藻類を育てるんです。藻類を入れて培養するために手作りした透明なビニールバックの装置を置いたり、藻類に空気や CO2 ガスを与えるためにガスチューブを屋内から引っ張ってきたりします。藻類の準備の際には、余計な菌がなるべく繁殖しないように注意しながら 5 リットル近くの水と藻類（培養液）を屋外の装置まで運ぶんですが、そういった作業は意外と大変です。藻類がどんどん増えるので、その増える様子や、どのような管理をすれば維持できるかといったことを毎日観察しました。

1 年半の業務委託完了の後、それまでは派遣社員として色んな会社で業務に従事していましたが、仕事が変わるとゼロ知識からのスタートとなってしまい、継続的に集中して業務をすることができないことを惜しく思い始めました。それでも派遣先の会社やその会社の社員さんのために頑張らなきゃならないという思いもありましたが、自分の取り組みたい仕事を探してみようと転職をすることにしました。



インタビュー
#3

防災士／日本ミクニヤ株式会社

上園（うえぞの） 智美（ともみ） さん

お生まれが熊本なんですね。

大学まで熊本でした。就職氷河期で、やっと決まった就職先が川崎でした。以来 30 年近く、川崎にいます。

どんなお子さんでしたか。

本がとっても好きで、小学校の図書室にある全書ものを全部読みたいと思っていました。本は、映像を自分の中に作れるのが楽しかったですね。

中学のころ、NHK の「地球大紀行」という科学番組をとても楽しみにしていました。中学の理科の先生から、図書館で「地球大紀行」を見て専門家のお話を聞く講座を紹介してもらい、そこで出会いがあったんです。講師で来られていた熊本大学の先生のお話がとても面白くて、私はこの先生の話をもっと聞きたいと思い、家に帰って「私は熊本大学理学部地学科に行きます」って宣言したんです。母もびっくりしてました。

地学の何にそんなにひかれたんですか。

古生物学の先生でしたが、化石の話というよりも、とにかく先生がわくわくしたお顔で話をしてくださるのが面白かったんです。宣言通り、熊大に入って先生の授業を楽しく聞いて、一緒にフィールドワークにも行かせてもらいました。ところが、あんまり好き過ぎてその先生のゼミには行かず、別の先生の指導を受けたんです。今で言うと「推し」みたいな感じ。こじらせてますね（笑）。

就職は地元で探したんですか。

表立っては言われないですが、やっぱり女の子は遠くまで行かなくていいみたいな「圧」はなんとなくありました。でも、就職氷河期に入っていたので就職口がなく、4 年生の冬に友達と「どうする」「東京とか遠いよね」などと言いながら会社案内を見ていました。

就職したのは建設コンサルタントの会社ですが、サルベージといって、海中の爆弾探しから出発した会社なんです。会社案内に「潜水訓練があります」と書いてあって、友達から「泳ぎも上手いし、いいんじゃない？」と言われて、面接を受けに来ました。溝の口駅に初めて降りて西口商店街に出たときは、戦後まもなくの雰囲気が残っていてびっくりしました。

入社して、潜水訓練をしたんですか。

伊豆に 1 週間、行きました。厳しかったです。朝はランニングをして、ウォーミングアップで 3 キロぐらい泳がされたりしました。でも私は海の仕事ではなかったので、仕事で直接役に立つことはありませんでしたね。

どういう職種で入ったのですか。

防災です。砂防といって、崩れそうな山の斜面を調査したり、砂防ダムという小さなダムを造る前の調査や点検をしたりしました。ですから、山に登ります。子どもの時から山に登っていたし、調査は面白かったんですが、だんだん登るのもきつくなり体力の限界を感じました。普通の山道を歩くのではなく、やぶを分けて道をつくりながら登らなければいけない。土砂が崩れた山肌はツルツルしていて、足を滑らしたら落ちてしまうようなところもありました。

ハザードマップの作成もしました。でも、ハザードマップは配っても捨てられてしまうことが多くて、なんだかもったいないと思いました。ハザードマップを皆さんに解説をするような仕事がこれから必要になるんじゃないかな、と感じて、そういう仕事が出来たらいいなと思っていました。

砂防の仕事を 3 年間やりましたが、最後のほうはものすごく忙しくて、ほとんど寝られない状態でした。それでしばらく休職して、体がきつくない仕事に移してもらいました。東京支店長の秘書的な立場で会議資料を作ったり、相談相手をしたり、業務補助もしました。

相談を投げかけてくれるとは、支店長はオープンな方だったんですね。

私は入社 4 年目の下っ端だし、私が答えても役に立つのかと思ったんですが、聞かれると考えるし、答えたいから勉強もするし、とてもありがたかったですね。

そのころ、社内で防災教育についての講演があり、ずっと考えていたハザードマップの話とつながったんです。「私がやりたいのはこれだ」と思い、「専門を防災教育にします」と社内で宣言しました。うちの会社は「やりたいことができる会社」を掲げていて、「あなたのやりたいことは何ですか」とよく聞かれていたので、やっと見つかったと感じました。タイミングよく、防災計画やハザードマップなどを作る「ソフト防災」の部署を新設することになり、私もその仕事を手伝うようになりました。

それで、「防災カフェ」と出会ったんですね。

イギリスやフランスで、カフェのような雰囲気の中で科学を語り合う「サイエンスカフェ」という取り組みが始まって、日本にも伝わってきました。これを参考に、防災も気楽にしゃべりながら学べる場を作ろうということで、内閣府が公示した平成 19 年度(2007 年度)のモデル事業を、うちの会社が受注したんです。全国 10 カ所で、その土地に合わせた防災の話が出来る企画を考えました。山形では芋煮を食べながらふるさとの歴史や文化の発表会をしたり、徳島の道の駅で足湯につかりながら地域のお年寄りから災害の話を聞いたり、大変でしたが面白かったですね。

サイエンスカフェのことはほとんど知らなかったので、実施方法がこれで良かったのかを知りたくて、自分で勉強しようと思い、北海道大学の科学技術コミュニケーター養成プログラム（CoSTEP）に入りました。私が入ったコースは、授業はウェブ配信が中心なので全国各地から参加していて、年齢も引退世代から大学院生まで幅広く、たくさんの仲間ができました。勉強してみたら、防災カフェではきちんと取り組めていたことが確認できてほっとしたし、自信が付きました。

▲ 防災勉強会で講師として登壇した上園さん

防災カフェのあとは、どんな仕事をしたのですか。

ハザードマップや防災啓発冊子作り、行政の災害対応訓練や防災計画改定のお手伝いをしたりしました。また、企業が事業継続計画（ビジネス・コンティニュイティ・プラン、BCP)を作るためのコンサルティングをしたりもしています。

2011年の東日本震災のときの状況を教えていただけますか。

私は川崎市内の 4 階建ての会社の 2 階にいました。揺れた瞬間に「地震です、身を守って！」「棚から離れて！」などと大声で叫びながら、私も机の下に隠れました。続けて 2 回、大きな揺れが来て、これは大変なことだと思いました。会社での災害対応が一段落した夕方、自宅の様子を見に行った帰りに、街中を歩いてくる人が多いのに気付いたんです。地震で電車が止まり、帰宅困難者が増えていたんですね。東京支店で上司だった人が社長になっていたので、社長に「徒歩で東京から帰ってくる人を支援しましょう」と進言して、了解をもらいました。当時の会社は国道 246 号が近かったので、会社の BCP で電車が止まって帰宅困難になり徒歩帰宅をする人が大勢出ることや、社員でも帰宅できなくなる人が出る事態を想定していました。

会社は、玄関が広くてそばにトイレがある構造だったので、帰宅途中の人達がトイレを使えるようにして、休憩できるように玄関にいすを並べました。絵が上手な社員に「トイレあります」と書いてもらい、発電機で照明を付けました。

インタビュー・構成 ／ 林 美子さん

札幌市出身。1985 年朝日新聞に入社し、経済部、北海道報道センター、特別報道部などを経て 2016 年退職。現在はジェンダーや労働分野を中心にフリーランスで取材、執筆を続ける。お茶の水女子大学大学院博士後期課程在学（ジェンダー学際研究専攻）。「メディアで働く女性ネットワーク」会員。

3 名のお話の続きは、2025 年度末に発行予定の報告書に掲載いたしますので、楽しみにお待ちください。

ロンドンの下着屋で考えた、フリーサイズと理想の体型

渡英の際に私はスーツケースのほとんどを毛糸で埋め尽くしてきたため、「数日洗濯しないと下着が足りなくなる」という状況が続いていました。そこでショーツを買い足すためにロンドンで初めて下着屋さんへ出かけたのですが、店頭で驚いたのがサイズ展開の豊富さでした。目の前に並んでいるのはXXSからXXLまでのさまざまなショーツ。履き心地重視のものからセクシーなデザインまで、どれもサイズの選択肢がたくさんあります。イギリスのサイズ表記に慣れていない私は見本のショーツを手に取り、自分の腰回りと相談しながら3枚のコットンショーツを選びました。

そんな買い物の帰り道、ふと私は日本の下着屋さんでの経験を思い出していました。

私の経験上、日本のかわいい下着屋さんで売られているショーツはほとんどがワンサイズでした。一応「フリーサイズ」と書いてあるものの、実際にはかなり細めの作り。「たまには可愛い下着でも買ってみようか」とお店に入っても、下半身にお肉がつきやすい私がちょうどいいサイズのショーツを見つけるのは至難の業でした。

「フリーサイズ」にすら含まれない私のお尻。デザインは気に入っても家で履いてみると腰回りを締め付けられ履き心地はよくありません。ブラジャーには細かいサイズ設定があるのに、ショーツにはほとんどバリエーションがないのはなぜだろう。もちろん胸のサイズによってブラジャー選びに苦労する人も多いと思いますが、私は下着屋さんに行くたび自分のお尻を憎む経験を繰り返してきました。でも、それが当たり前。「私のお尻は”普通の人”よりお肉が多いんだから仕方ない」と思ってきました。

だからこそロンドンの下着屋さんで様々なサイズのショーツがズラリ並んでいるのを見たとき「自分の身体が想定されていることの嬉しさ」を強く感じたのです。それと同時に、これまで知らず知らずのうちに「この社会で自分の身体は想定されてない」というメッセージを受け取り続けてきたと気づくことになりました。

日本に限らず体型や体重に対するプレッシャーは世界中に存在します。文化圏によって「理想の体型」や「美の基準」は異なりますが、こうした強いプレッシャーが健康を脅かすケースは少なくありません。ここ数年は若者の間でSNSを通じて「痩せる薬」が大流行し、治療を必要としていない人がそうした薬を使って過度なダイエットを行うことの健康被害が問題視されています。

私自身、日常の中で「もっと痩せなきゃ」「この体型は理想じゃない」と感じる瞬間はまだたくさんあります。それでも、こうした小さな場面で「そもそもなぜ私は痩せなきゃと感じるんだろう」と立ち止まり、社会から知らず知らずのうちに受け取ってきたメッセージについて考えてみることは、とても大切なんじゃないか。そんなふうに感じた出来事でした。

伊藤（いとう）まり

1993年東京生まれ。編集ライター。大学在学中よりフェミニズム活動に参加し、署名活動やパフォーマンス、レクチャーなどを行う。現在はロンドン在住。ウェブメディア「パレットーク」副編集長をつとめる傍ら、ジェンダーやフェミニズムに関する執筆や講演を行う。個人でもフェミニズムやロンドンでの暮らし、趣味の編み物について発信中。

地震ともに考えたこと　多様な視点と災害のかたち

THAILAND

今号では、3月に発生した地震について、私自身の体験とともに、隣国ミャンマーの状況やジェンダーの課題についてお話ししたいと思います。2025年3月28日、タイ時間の午後1時20分、ミャンマー・ザガイン地方を震源とするマグニチュード7.7の地震が発生し、その12分後にはマグニチュード6.4の地震も起きました。

私の住む地域でも揺れを感じ、まず大きな縦揺れ、続いて横揺れが長く続き、不安な時間を過ごしました。揺れが収まった後は、近所の人々とともに外へ出て様子を見守りましたが、幸い高層ビルも少なく、大きな被害はありませんでした。

ミャンマーに近いタイ北部では地震が起こることもあることを知っていましたが、首都バンコク近くのこの地域で地震に遭うとは思っておらず、驚きとともに、日頃からの災害への備えの大切さを改めて実感しました。タイでは、初めて地震を経験する人も多く、バンコクでは電車やバスが運休し、渋滞も悪化するなど、混乱が続いたそうです。

今回、外国人としてタイで地震を経験したことで、言語や情報へのアクセス、地域とのつながり等の重要性を実感しました。日本で災害に直面する外国人の不安や孤立の問題を、より身近に考えるようになりました。防災・減災への関心が高まっていますが、その中に多様な視点を含める必要性を改めて認識しました。

震源地のミャンマーでは大きな被害が発生し、執筆時点で4,000人以上が亡くなり、負傷者や行方不明者も多数いると報じられています。私の通う学校にはミャンマー出身の学生も多く、友人から現地の様子を聞くことができました。

2021年に発生したクーデター以降、内戦が続くミャンマーでは、震災前から多くの人が人道支援を必要とする状況になりました。このような状況は地震発生以降、ますます悪化しています。被災地には支援が届きにくく、友人たちはみずから募金を集めて被災地に届けています。国軍は一時停戦を表明しましたが、空爆は続いているとのことです。実際に、倒壊した建物から助かった家族が、その後の空爆で命を落としたという悲しい話もあるそうです。

さらに5月から10月にかけては雨季が始まります。復興が進まない中、屋外やテントでの生活を余儀なくされている人々にとって、感染症のリスクは深刻です。医療機関も被災している中で、特に高齢者や子どもなど、より脆弱な立場の人々への影響は一層深刻でしょう。こうした災害の影響は、社会的・文化的背景によって異なり、ジェンダーの視点を加えるとさらに複雑になります。

例えば、ミャンマーでは男性が主な家計の担い手である家庭が多いそうで、失業は家庭に大きな経済的な影響をもたらすことはもちろんのこと、自己肯定感の喪失が家庭内暴力の引き金になることもありえます。貧困は子どもたちに児童婚のリスクをもたらし、再建が進まない住環境は女性や子どもの安全に直結します。

今回の経験を通して、日頃からの備えの大切さを改めて実感するとともに、その備えには多様な背景や立場にある人々の視点が欠かせないと感じました。多様な声に耳を傾け、誰ひとり取り残さない支援のあり方をみんなで考えていきたいと思いました。

荒川（あらかわ） 泰輝（たいき）

1993年、茨城県生まれ。早稲田大学卒業、英国・サセックス大学ジェンダー・暴力・紛争修士課程修了。男女共同参画センター等での勤務を経て、現在タイにある大学院にてジェンダーと開発学の修士課程に在籍中。

2024年12月発行
（著者）宮地尚子
（出版）NHK出版

『傷つきのこころ学』

デジタル化の進展やSNSなどコミュニケーションツールの更なる広がりによって、リアルとオンラインの両方の世界を行き来して生活するようになった現代社会は、「傷つきやすい時代」と著者は言う。私たちが、ある程度の「傷つき」を受け入れて前に進むためにどう生きるのが“ベター”なのか、トラウマ研究の第一人者として、また臨床医として、数多くの「傷つき」と向き合ってきた著者が、現代に特有の「傷つき」が生まれる背景、「傷つき」の定義、対処法を多角的にわかりやすく解説してくれる一冊。生命を脅かすようなトラウマ体験が私たちの心に影響を与え、深い傷を残すことは誰しも知るところだろう。本書は、さらに、日々の暮らしのなかで起こる「ちょっとした人間関係のすれちがい」や「誤解」などによる「傷つき」にも目を向けて寄り添う。そして、「傷つきの練習」という言葉を用いて人間関係に慎重になりがちな私たちへ「必要以上に怖がることなく傷つく練習をしてほしい」「孤立しないでほしい」と伝える。

100 ページほどの小冊子は手に取りやすく、親しみやすいイラストは、読み手のこころを癒し穏やかな気持ちにさせてくれる。対人関係に悩む人や、傷つきを抱えた人とどう接したらいいか迷っている人にもおすすめしたい。

2021年6月発行
（著者） 朱野帰子
（出版）講談社文庫

『対岸の家事』

専業主婦である詩穂は、助け合って子育てができる“ママ友”を探していますが、周囲は共働きが多く、なかなか見つけることができません。児童支援センターで出会った育休中の母親達とは話が合わず、仲良くなるどころか、陰で「専業主婦は絶滅危惧種」「時流に乗り遅れている」などと言われてしまう始末。かろうじて親しくなった育休中の“パパ友”には「この国には、女性を家事に専念させる余裕はない」となぜか説教されてしまいます。しかし専業主婦不要論を唱える彼らも、しだいに家事の大変さに圧倒され、限界を感じていくことに…。

家事という一言で表される言葉の裏には、膨大な労働や精神的負担が含まれていますが、この物語には、その営みが過小評価されている現実が浮き彫りにされています。登場人物たちが抱える葛藤がリアルに描写されていて、それぞれの立場に共感し、成長を応援できることもこの小説の魅力です。

日々家事に奮闘している人にも、あまり意識せずに暮らしている人にも、是非読んでいただきたい一冊です。

2023年3月発行
（著者）宮島未奈
（出版）新潮社

『成瀬は天下を取りにいく』

地元に住んでいた頃、県外の人に「そこって何があるの？」と聞かれても「何もない」と答えていた。「いろいろある」と言えるようになったのはそこを出てからで、それまでは「地元には何もない」と思っていた。

この本の舞台の滋賀県大津市は、私の地元と同じくらいの人口らしい。でも、この本の登場人物は「ここには何もない」とは言わない。むしろ、そこにあるものやあったものを大事に生活している。主人公の成瀬は、特に滋賀愛が大きい。夏休みに毎日ローカルテレビに映ってみたり、県民割で琵琶湖の遊覧船に乗ったり、市民憲章を覚えていたりする。そこも成瀬の魅力のひとつだが、ほかにも、自分のしたいことをはっきり主張し行動するところも良い。夢は200才まで生きることで、そのために必要な知識を得て不慮の事故にも備えている。発言や行動の結果、笑われたり孤立したりすることもあるものの意に介さず、充実した日々を送っている。

最後の方で「膳所から世界へ」というセリフがある。この後、成瀬は世界に出ていくのだろうか、それとも滋賀にいるのだろうか。どちらにせよ、地元愛は変わらないだろうし、自分を貫くに違いない。「どこに居ても自分らしく生きて良い」成瀬を見ていると、そう勇気づけられる。

『かわさきの男女共同参画データブック 2024』

このデータブックは、川崎市民を対象とした男女共同参画に関する意識・実態調査から得られたデータを使用しつつ、既存統計も活用して作成しています。川崎市の“今”や特徴がわかるように、できるだけ川崎市の“昔※”や区別のデータ、全国・他都市と比べています。

※川崎市の“昔”を25年前として、当時（または入手可能な近い年）のデータで掲載

かわさきのキホン、働く、暮らす、決める、ジェンダーに基づく暴力被害経験の5つのテーマから構成しています。

川崎市の今を「男女共同参画」の視点から読み解く統計資料の1つとして、講座や研修、調べ学習などでご活用いただければ、大変幸いです。

発行年月	2025年3月	
仕　様	A4横 ／ 全53頁 ／ PDF	
構　成 テーマ	かわさきのキホン …… p4-14 働く …… p15-27 暮らす …… p28-35 決める …… p36-43 ジェンダーに基づく暴力被害経験 …… p44-52	右記の二次元バーコード及び下記URLよりPDFデータをダウンロードいただけます。 https://www.scrum21.or.jp/issue/dvdatabook

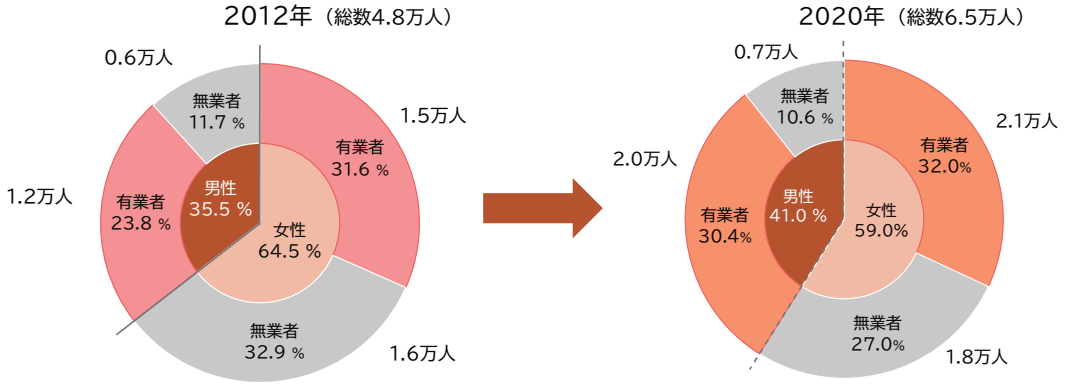
PICK UP

『かわさきの男女共同参画データブック2024』　テーマ：「暮らす」（P33）より

働きながら家族の介護※をしている者の割合の変化

（家族の介護をしている状態にある者に占める有業者の割合の変化）

※ ここでいう「介護」とは、日常生活における入浴・着替え・トイレ・移動・食事などの際に何らかの手助けをする場合をいいます。このデータには、介護保険制度で要介護認定を受けていない人や、自宅外にいる家族の介護も含みます。ただし、病気などで一時的に寝ている人に対する介護は含めません。



出典：川崎市「就業構造基本調査結果」
https://www.city.kawasaki.jp/shisei/category/51-4-7-6-2-0-0-0-0-0.html（2025.1.14取得）

家族の介護をしながら働いている人は、2012年に比べ、2020年には総数で1.7万人増加しました。内訳をみると、男女ともに有業者の割合が増えています。介護の担い手は、2012年時点では、女性が64.5%、男性が35.5%でしたが、2020年になると、女性が59.0%、男性が41.0%となっています。

Information

シングルマザーとプレシングルマザーのための

ひまわりフェスタ

日々生活に追われて　自分のことは後回し。誰かとおしゃべりしたい、ゆったり過ごしたい。
そんな、シングルマザーの方におススメです。かまえず、かかえこまず、ふらりと立ち寄って。
日頃の心や身体のちょっとしたモヤモヤや不調を話せる相談員も常駐しています。
みんなで集まり、ご飯を一緒に食べたり、おしゃべりしたりしませんか。
各イベントへは親子で一緒に参加したり、親子、別々で過ごしたりが可能です。

開催日時　**8/3㈰ 10:30～15:00**

会場　すくらむ 21

内容　無料ごはん／各種相談コーナー／食品・日用品・おしゃれ古着プレゼント／シングルマザー・プレシングルマザー同士話せるほっとサロン／こども向け上映会／子ども縁日＆駄菓子屋さん など

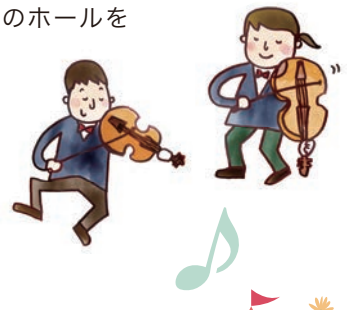
申込　6 月 26 日㈭ 10 時～　すくらむ 21 のホームページから要申込

詳細は、すくらむ 21 のホームページをご覧ください。

イキメン研究所プレゼンツ

親子で楽しむ物語コンサート ＆すくらむマルシェ

地域や家庭でイキイキと活動するパパたちの集まりであるイキメン研究所では、すくらむ 21 のホールを会場にして毎年夏に 0 歳から参加できる親子向けのコンサートを開催しています。
今年は、コラボイベントとして、すくらむマルシェを同日開催！
マルシェでは、川崎の地域で活動する団体・女性起業家の皆さんが、野菜や焼き菓子、雑貨、ワークショップなどで出店します！
すくらむ 21 での親子向けコンサートやマルシェでのお買い物をどうぞお楽しみください。



開催日時　**8/17㈰** マルシェ　：**12:00～16:00**
コンサート：**14:00～15:00**

会場　すくらむ 21 ホール（親子で楽しむ物語コンサート）及び
館内の各部屋（すくらむマルシェ）

申込　親子で楽しむ物語コンサートのみ要申込　7 月 16 日㈬ 10 時～　すくらむ 21 のホームページから
すくらむマルシェは申込不要

詳細は、すくらむ 21 のホームページをご覧ください。

かわさきの男女共同参画情報誌
すくらむ

発行年月　令和7(2025)年6月
編集・発行　川崎市男女共同参画センター（すくらむ21）
所在地　〒213-0001
川崎市高津区溝口2丁目20番1号
ホームページ　https://www.scrum21.or.jp/
電話　044-813-0808
FAX　044-813-0864